

〔下學集上〕

胡馬ウマ二字共也、然日本人呼馬之一字、曰胡馬也、似無其理歟、馬氣形多出於北胡、故曰胡馬也、句云、胡馬嘶北風、越鳥巢南枝、

〔圓珠庵雜記〕駒は小馬なれど、唯うまと同じくよめり、略○中

馬ウマ 美、うまの義に名付くるか日本紀に、よも人をうま人といへるにて思ふべし、涅槃經には、馬は世の財なる故に、其肉をくはずと見えたり、

眞淵云、牛も馬につぎて人の用をなせるを、から人は好みてくへば財とてくはぬにはあらで、味のわるければ成るべし、馬はけもの、中によき物にて、うまけものといふか、いにしへは何にてもよき事をうましといへり、うま人といふもよき人てふ意なり、

涅槃經云、或言、如來不聽比丘食十種肉、何等爲十、人、蛇、象、馬、驢、狗、獅子、猪、狐、獼猴、其餘悉聽、

史記秦本紀云、初繆公亡善馬、岐下野人共得而食之者三百人、吏遂得欲法之、繆公曰、君子不以畜產害人、吾聞食善馬肉不飲酒傷人、乃皆賜酒而赦之云々、この事韓詩外傳、呂氏春秋、說苑等にもみえたり、

〔日本釋名中〕馬 まといはんとて、むの字を付たり、むはまの發語也、まは馬の字の音也、音を以て訓とせし例おほし、

〔東雅十八畜獸〕馬 ムマ 保食神殺されし後に、馬牛と化れる事、舊事紀に見えたり、其後大己貴神の倭國に上り給ひし時、御馬の鞍に手をかけられしなど、古事紀に見えしは、此時既に馬に駕する事ありけるなり、又舊事紀に、素戔嗚神、天斑駒を逆剎にし給ひしと見えしかば、駒を呼びてコマといふことも、其代に聞えしなり、古事記には、天斑馬と云るしたれば、かよはしては馬とも駒とも云ひしなるべし、ムマといふ義詳ならず、コマは即小馬也、爾雅註にも、駒は小馬也と見ゆ、

萬葉集抄に、昔百濟國より馬を此國へ奉りたりけるに、いくばくもなかりければ、めづらしき獸にして、ウマをば其時にはイバフミ、ノモノとぞ云ひける、それを秦氏の先祖よく乘れり